

生保世帯の8割が引下げ

9月議会の生活福祉委員会の審議の中で、8月から強行された生活保護世帯の給付水準引下げの実態をたずねました。生活支援課の答弁によると、鈴鹿市の生活保護を受けている951世帯のうち、約8割に当たる784世帯が見直しにより引下げになり、その平均額は月額1200円、最高は9340円でした。今回は引下げ第一弾で、今後も引下げが予定されます。すでに老齢加算の廃止（2006年）、母子加算の廃止（2009年）がされた上での引下げで、憲法25条で保障されるべき「健康で文化的な最低限度の生活」すら出来なくなっています。この引下げは生保受給世帯だけでなく、就学援助、最低賃金、住宅家賃、保育料をはじめ各種福祉制度に連動し、悪影響を及ぼします。生活保護バッシングは、全国民の暮らしの水準を引下げ、格差社会をますます広げることになります。

痛快！堺市長・竹沢さんの再選

9月29日に行なわれた大阪・堺市の市長選挙で現職の竹沢修身氏が、維新の会を大差で破って再選されたニュースに、胸がスカッとしました。あのゴーマンな橋下徹・大阪市長に、これ以上大阪も日本も好き勝手にされてたまるか！との思いが市民の中に広がった結果です。例えて言えば、鈴鹿市の市政に隣の津市や四日市市の市長が乗り込んできて、自分の手下を使ってひっくり返そうとしたのと同じで、こんな無礼・失礼なことはありません。

竹山氏は、静岡大・人文学部で私の1年先輩の方です。立場は保守の方ですが、堺市政は中学校までの医療費無料化、教室にエアコン取り付け、100円バスの全市運行、国保税の連続引下げなど、しっかりと住民目線での政策を進めています。しかもそれを共産党から自民党までの支持を得てやっている。70万人の大都市でも頑張れば、こんなことができるのです。ぜひ竹山市長には、全国の模範となる地方政治の灯台になってほしいと思います。

「学力」よりも子どもの生活が問題

市教委が「平成25年度全国学力学習状況調査の結果について」、鈴鹿市の結果をまとめ発表しました。内容は、国語と算数の正答率が上がった下がった、全国や県の平均よりちょっと低いなどという数字の比較で、たいした意味はありません。まして、テストの順位争いをあおり「良い学校・悪い学校」のレッテルを貼るなどは、論外だと思います。

それよりも私が注目したのは、テストの点数以外の生活や学習について調べた児童生徒の実態です。次の表を見て、皆さんはどう感じますか？

項 目	小学校	中学校
自分にはよいところがあると思いますか	33.7%	22.5%
将来の夢や目標を持っていますか	70.0%	42.8%
ものごとを最後までやりとげてうれしかったことがある	71.3%	70.6%
難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦している	26.0%	19.4%
学校へ行くのは楽しいと思いますか	54.0%	47.6%
学校で友達に会うのは楽しいと思いますか	82.4%	77.6%
国語の勉強は好きですか	47.4%	45.1%
数学の勉強は好きですか	36.3%	27.8%

半分の子どもが「学校が楽しくない」のに どうして「学力向上」できるのか？

「自分にもよいところがある」と思う子どもが、小学生の3人に1人、中学生の4人に1人しかいない。夢や目標をもつ子どもが、小学校で7割いるのに中学生になると4割にダウンする。半分の子どもが学校が楽しいと思っていない。こんな実態をどうするのか？ どうしたら楽しい学校ができるのか？ ここにこそ、教育委員会は力を注ぐべきではないでしょうか。

全国学力テストの成績に一喜一憂し、うちの学校は県下で何位、全国平均より上か下か、などを競い合い、それを教職員の評価につなげていくことは、学力向上どころか、教育の荒廃をもたらします。

いちど先生方にも「学校に行くのは楽しいですか」「どんな子どもが良い子だと思いますか」などと、アンケートしてみてもはどうでしょうか。

今年もコメ10俵の大豊作でした

毎年1反の田んぼでコメを作っていますが、9月5日に稲刈り、玄米にしてもらったら、何と20袋、10俵もありました。去年につづいて大豊作でした。今年は猛暑で、人間はダウンしましたが、イネにとっては絶好の条件だったのでしょう。これで向こう1年、おいしいご飯がいただけます。

八ヶ岳の頂上山小屋で温水シャワー

8月に続いて9月にも八ヶ岳に登りました。前は雨のために赤岳しか行けず、今回は残りの横岳・硫黄岳と回りました。頂上の硫黄岳山荘に泊まってビックリ、温水シャワーとウォッシュレットトイレが付いていたのです。山小屋も進歩したものです。



上水道の給水施設を見学しました



10月15日、森川議員と共に水道局におじゃまして、いまの水道事業について説明を受け、更新工事の完成した平田送水場と、これから本格工事の始まる平野送水場を案内してもらいました。（写真は平田送水場の除鉄・除マンガンろ過機）

水道局には、長良川河口堰からの水を鈴鹿に引く「第5期計画」（2000年）前後には頻繁に通って大議論をしましたが、市が方向転換し、実質的に長良川導水を止めた計画変更（2009年）で一段落し、その後は大きな問題もなく健全経営になっています。

猛暑だった今年の夏の1日最大給水量を尋ねると、最高で7万8千トンだったということでした。元の5期計画が12万5千トンと過大すぎたことは明白で、計画変更後の9万5400トンでもまだ十分な余裕があります。

いま水道局が力を入れているのは、老朽化を迎えた基幹施設の更新です。平田送水場は、脱炭酸、除鉄・除マンガンの最新設備でしっかりと浄水し、より安全でおいしい水を提供しています。さらに平野送水場の更新、国府第2配水池の建設などを進めて、全市への給水体制の万全をはかります。

ずいそう



半沢直樹とダンダリン

テレビドラマ「半沢直樹」が終わったが、多くの人が熱中して見ていて、私もその1人であった。決めのセリフ「やられたらやり返す、10倍返しだ！」にシビれる人が多かったというが、私はちょっと違う場面に感動していた。それは銀行員・半沢が、孤立無援の窮地におちいっても頑張っている姿に、それまで物言えず沈黙していた職場の部下や同僚たちが、勇気を出して「私も手伝います！」と参加してくる場面だ。

脅しや利益誘導に屈せず、人々を「共感」させる

心理学者の高垣忠一郎氏は、人を動かす方法には3つの方法があると言う。それは「脅し」と「利益誘導」、そして「共感」である。半沢の敵はいつも権力を使った「脅し」と、人事やカネを使った「利益誘導」で、自分の身の保全を図ろうとする。対して半沢は、銀行の本来の社会的使命、汗して働く庶民のための金融機関という原点を主張し、脅しにも利益誘導にも屈しない。その姿に「共感」する味方が徐々に増えて、最後に逆転勝利、敵は土下座し「倍返し」となる。

10月から始まったドラマ「ダンダリン」も面白そうだ。主人公・団田凜は女性の労働基準監督官、いま問題の「ブラック企業」経営者によるパワハラ、「名ばかり店長」などをしつこく摘発し、苦しむ労働者を救う。ここでも、事なかれ主義の同僚や上司が、最後には独走する主人公に「共感」し、行動を共にする。「半沢直樹」と「ダンダリン」、どちらも、いまの「ルール無き資本主義」のもとで暴利をむさぼり、庶民を食い物にしている企業を、痛快にこらしめる正義の味方、現代の「水戸黄門」だ。

映画では、「そして父になる」が良かった。子どもの取り違え事件の当事者になった2組の夫婦。6才まで育てた「わが子」か、血のつながった本当の「わが子」か、どちらを選んでも割り切れない思い。ハッピーエンドにならない物語は、観た人に「自分ならどうするだろう」と考えさせられる。

「親になる」とは、生物的に子どもを持っただけでは合格ではなく、子育てに明け暮れる日々の時間の中で、だんだん親になっていくのだ。だれもが自分の子育て、親子関係を振り返ってみる、良い機会になる映画だ。